

自然誌 だより

Natural history

秋

三重自然誌の会情報誌 138 号

2023年 12月

可愛いシマリス

シマリスはかわいい！ですが外来種です。10月31日に、鞍掛峠ー御池岳ーコグルミ谷のコースをハイキングした際に、途中ですれ違った登山者の多くが、シマリスいましたよーと嬉しそうに教えてくれました。御池岳山頂（標高1247m）までは1頭も見ることはありませんでしたが、少し下って8合目標識がある付近から姿を見せ始め、コグルミ谷の「長命水」という水場があった地点を過ぎたあたりまでの道中で8頭に出会いました。沢沿いを中心に生息しているようです。日本の獣はほとんどが夜行性で、人前に姿を現すことが稀なのに対して、シマリスは昼行性で人をそれほど忌避せず、かわいく見える仕草をします。しかし、外来種ですので在来の動植物に影響を与えていることも考えられ、かわいいからと放置してよいものではないでしょう。かつてはコグルミ谷が生息地の中心であったのが（清水2015; 本誌105号）、より上方に生息域を広げているようです。まずは、正確な分布域を把握し、外来種であることの啓発看板を登山口に設置してほしいと思います。登山客が喜んでいるから良しとしてしまえば、愛玩動物の遺棄を助長してしまいます。末筆ながら、ミズナラ実の同定をお願いした山本和彦・市川正人両氏に感謝します。



写真 ミズナラの実を食べるシマリス（滋賀県東近江市君ヶ畑，2023年10月31日）

（清水善吉：松阪市日丘町1386-17）

ヤノネボンテンカ、田中川に咲く

篠 木 善 重

ヤノネボンテンカ *Pavonia hastata* (アオイ科) は落葉低木で、南アメリカ原産の帰化植物です(植村ほか2010)。三重県内では、2000年9月に四日市市の鈴鹿川河口で採集されたのが初記録のようです(太田・太田2010)。標本調査に基づいたデータ集である「みえ生物誌-植物」(三重自然誌の会2018)にはこの記録は収録されていないので、おそらく初記録となった標本の所在が確認できなかったものと推察されます。なお、同誌には四日市市塩浜と桑名市福岡町で市川正人氏が採集した標本が三重県総合博物館に収蔵されていることが記載されています。



写真1 砂地に育つヤノネボンテンカ(左端は花と蕾)
津市河芸町東千里、田中川河口右岸 (2023.9.25)



写真2 津市河芸町上野、田中川右岸汐見橋付近の群生
(2023.9.29)



写真3 津市河芸町中別保の空き地にて(2023.11.15)

のと推察されます。なお、同誌には四日市市塩浜と桑名市福岡町で市川正人氏が採集した標本が三重県総合博物館に収蔵されていることが記載されています。

筆者は、塩生植物に寄生する蛾の生息状況を調査するため2023年9月25日に訪れた津市河芸町の田中川干潟で、護岸堤防際の砂浜に咲く1株の初見の花と出会いました(写真1)。ムクゲ(アオイ科)のミニチュアのような印象で、一目で帰化種と察し、本種であることはすぐに判明しました。5枚の花弁の基部は濃いワインレッド色で、また蕾は多数の赤い筋が走って、どちらも美しい。葉の形状は細長いものや短く丸みを帯びたものもあるが、どの葉も両縁が鈍く鋸歯状に波打っています。田中川周辺を散策している知人からの情報提供を受けた数日後の29日に、発見場所から約250m上流の右岸、汐見橋近くに群生する本種も確認することができました(写真2)。

その後、同年11月15日には河芸町中別保の空き地でも10株以上の開花株を見つけました。直立した茎1本の株もあれば(写真3)、根際から多数の細い枝を叢生して灌木状態の株もありました。数日後、この空き地の除草が行われ、本種はすべて刈り取られてしまいました。周辺の民家の庭先を覗き込みながら搜索したものの、本種が植えられている庭は見つからず、この空き地で増殖した原因は解き明かせませんでした。

引用文献

三重自然誌の会2018. みえ生物誌-植物. 三重自然誌の会, 松阪, 749p.

太田久次・太田久裕2010. 新版三重県帰化植物誌. ムツミ企画, 津, 316p.

植村修二ほか2010. 日本帰化植物写真図鑑第2巻. 全国農村教育協会, 東京, 579p.

(しのぎ よししげ: 津市河芸町中別保2230-1)

宮川上流域の特別な谷～其の二（絶滅危惧種オオミネイワヘゴの生育を確認）

宮 島 美 栄

本誌135号の拙記事に記した大熊谷以外にも宮川上流域には魅力的な谷や沢がいくつもある。私が歩いて観察できる谷は決して多くはないが、どの谷にも多くの貴重なシダ植物が生育している。

「日本産シダ植物標準図鑑Ⅱ」（海老原淳2017; 学研）で、生育分布が日本全国の中で大台町と奈良県十津川村のみとなっているレッドリスト絶滅危惧ⅠA類の「オオミネイワヘゴ」がこの夏（2023年7月17日）宮川上流の谷で確認できた。元々同谷で確認されていたものの、個体数は圧倒的に少なく、しかも前回確認時（2019年頃）には風前の灯の如く貧弱な株であったそう（市川正人ほか私信）。今夏見つかった個体は、葉も4～5枚付け、株も立派なものであった（写真1）。

その谷も大熊谷と同様に他ではあまり見られない希少なシダ達が揃う。ベニシダ類のヌカイタチシダモドキ、オワセベニシダ、そして今回初めて知るところとなったサイゴクベニシダの一型のトガリバサイゴクベニシダなるものも（写真2）。これは、私がシダ・コケ同好会にて教示いただき、実際に自生している状態を愛知教育大学の芹沢俊介先生に観察いただいて判明したものである。シダ・コケ同好会のM氏によるとこのトガリバサイゴクベニシダは、中国南西部では有性生殖種が多く見られ、日本でもあるだろうと探しているが未だ発見に至っていないと。ことで、仮に有性生殖種（孢子嚢1個の中の孢子数が55～64なら有性生殖型）と確認されれば、日本初、ということになるそう。そういう可能性を秘めたシダがポツポツと複数の谷で確認でき、宮川上流域の谷群の特別さを物語っている。

また、もう一つ特筆すべきシダがチャセンシダ科のヌリトラノオ類である（写真3）。これにはシダ・コケ同好会の先生方も首をかしげ、観察にいらっしやった芹沢先生が持ち帰り確認しますと仰られ、後日ご返答いただいた。新種とまでは行かず、テンリュウヌリトラノオの範疇ということであった。テンリュウヌリトラノオも、現在改訂中の三重県レッドデータブック調査対象種となっている希少なシダである。典型的なテンリュウヌリトラノオではないにしても、この谷をはじめ宮川上流域の谷群を特別たらしめる要因となっているのは間違いない。

（みやしま みえ：大台町上三瀬52-1）



写真1 オオミネイワヘゴ



写真2 トガリバサイゴクベニシダ



写真3 テンリュウヌリトラノオ

キジバトの巣立ちを見守って

今 堀 聖 史

山鳩とも言われていたキジバトが市街地で繁殖し始めたのは1960年頃で、今では民家の庭や子どもが遊んでいる公園で餌をついばんでいます。知人のBさんが「玄関先の木に巣をかけて親鳥が座っており巣の横を通るとき目が合う。大丈夫かな」と不安げでした。巣から鳥が飛び出すような事をしなければヒナが育ちますと返事しましたが、お宅を訪問してBさんの不安が判りました。

玄関からカーポートへ2、3歩進むと営巣木があり、大人が立ち止まると顔の位置から約80cmに巣があり、座っている鳥と目が合います（写真1）。家族3人が毎日行き来し、来客と立ち話もするので抱卵しないかもしれないと案じていましたが、巣立ちの日を迎えました。でも、ヒナの1羽は飛ぶ力がなくて取り残されるという出来事がありました。気をもむ数日の間にヒナは力をつけ、巣立って庭から去ったと思っていた翌日、2羽のヒナが庭に現れてしばらく経過していました。とても印象的な出来事をBさんの話やメモを参考に、時々訪れて観察したことも交えて紹介します。



写真1 抱卵中のキジバト（2023.10.27津市北丸之内）

10月初旬、玄関に近いマンサクの枝を切り始めた時にキジバトが飛び出し、巣があったので作業をやめ、様子を見ることにしたそうです。外出して帰宅するとキジバトが再び巣に座っていた。「もう枝は切らないよ」とキジバトを刺激しないように気をつけ始め、1週間が過ぎて互いに慣れ、以前のように巣の横を行き来し、時に枝を少し分けて覗いてもキジバトは静かに座っていました。10月中旬、抱卵を始めた日は不明ですが、抱卵期間は15～16日なので20日を過ぎても座っているのはヒナが未だ生まれていないのかと覗く回数が増えていました。

10月26日、親鳥が巣にいないことに気付き、覗くとヒナの頭が二つ見えました。少し大きくて黒っぽく、羽が生え始めていたのでヒナが小さい時は親鳥が抱いていたのでしょう。数日後には親鳥が給餌する場面を見ることができました。日に日に大きくなってヒナの背は褐色の羽で覆われ、巣の縁に立っている時もあるので巣立ちが近いと感じました。

11月3日朝は巣内にヒナは2羽いましたが、12時頃は空っぽでした。2羽は巣立ったと思っていたのですが、午後1時頃に親鳥が盛んに鳴いて通路や縁側をうろうろしていました。ヒナがいるのだろうと周辺を探すと植木鉢の中に1羽のヒナがいました。しばらくして親鳥が飛び去り、ヒナはカーポートの車の後ろまで歩いて行き、2車線道路の1m手前でタイヤの後ろにうずくまってしまいました（写真2）。強い日差しが照り付けていたので枯れ草で影を作っていました。放置しておくヒナが道路に出て自動車にひかれる、カラスや猫がうろうろしているので襲われるなどが心配で、塵とりに乗せて運ぼうとするとヒョイと飛び越えて小走りで庭の奥まで移動しました（写真3）。16時頃にはヒナがいる茂みに親鳥が来ていたので、給餌してその周辺で夜を過ごしたと推定しました。4日朝9時半ころ物置に



写真2 巣から出たが飛べないヒナ（2023.11.3 津市北丸之内）

伏せてある竹かごの上で給餌を受け、昼過ぎまで物置の近くにいました。14時過ぎに見かけなかったので茂みで過ごしていることと思っていました。

11月5日朝、9時過ぎから庭や屋根で親鳥が鳴き続け、ヒナがいないことがわかりました。10時半頃ころ物置の近くにきた親鳥の視線の先にあるビニール傘から小さな声が聞こえました。傘を覗くとヒナがおり、少し開いてやると傘の骨に引っかかった足が抜けて地面に立ちました。羽を広げ羽ばたいたので怪我していないことがわかり一安心でした。親鳥はすぐにヒナの近くに降り立って給餌を始めまし



写真3 小走りできるヒナ(2023.11.3津市北丸之内)



写真4 親鳥から給餌してもらうヒナ(2023.11.5津市北丸之内)

た(写真4)。3mほどの距離で三人が見ている庭の通路で1分以上給餌していました。その後、ヒナは小さな木の下に茂みにうずくまり、午後からはヒナも親鳥も見かけませんでした。6日、親鳥が家の前の電線でしばらく鳴いていたのでヒナは庭にいたかもしれません。

11月7日、昼ころに「デデッポポーデデッポポーデデッポ」と親鳥の静かな声が20分以上断続して聞こえ、12時半ころユズの枝葉が茂っている周辺でヒナ2羽が餌を探しているようでした。しばらくして1羽のヒナが飛び立って電線にいる親鳥の近くに止まり、2羽は道路を横断して公園の方へ飛んで行きました。14時ころにもユズの木の下に2羽のヒナがいましたが、直ぐ茂みの中へ見えなくなりました。その後ヒナを見ることはなく、親鳥が電線で鳴くこともなくなりました。

Bさん家族は巣立ったヒナが2羽揃って庭に来るとは予想していませんでした。育ちの遅かったヒナが元気な姿を見せてくれたと喜び、約1ヶ月余のキジバトがいた日々は楽しかったそうです。ヒナは何かを記憶しているに違いなく、飛び回るようになった幼鳥が庭に現れるかもしれません。

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)

逃げないニホンカモシカ

長谷川 好 昭

熊野市紀和町、布引の滝に向かう林道でニホンカモシカに遭遇、約10mの車内から撮影、なかなか逃げないのでゆっくり車を進ませたらやっと山に逃げだした(写真1)。熊野市井戸町の一ノ水峠でニホンカモシカを斜面で発見、約15mの車内から撮影、結局最後まで逃げなかった(写真2)。県外であるが、奥蓼科の湍御殿湯でニホンカモシカを斜面で発見、車から降りて約15mの対岸から撮影、人に馴れているようで結局最後まで逃げなかった(写真3)。

筆者の車はハイブリッドであり静かで、近づいても逃げないのは近眼で難聴かと思えたが、清水善吉氏によるとニホンカモシカは近眼であるが難聴ではない、でも人が車から降りると逃げるとのこと。いずれにしても、ニホンカモシカが人馴れしていることを感じさせられる遭遇であった。



写真1 熊野市紀和町小栗須布引の滝、2017年2月5日



写真2 熊野市井戸町一ノ水峠、2021年8月28日、



写真3 長野県茅野市北山奥蓼科湍御殿湯、2021年10月18日、

(はせがわ よしあき：鳥羽市鳥羽1丁目23-4)

東紀州に出現したジャンボ植物，ヨシススキ（その１）

山 本 和 彦

ヨシスキって？

紀勢自動車道(図1)を南下すると、紀勢荷坂トンネルを出た辺りから道路の両脇にジャンボススキとも言えそうな異様な大きさのススキに似た植物が目に入ってきます。この光景は熊野尾鷲道路(図1)にも見られ、三木里IC付近を除いて、終点の熊野大泊ICまで続いています。この植物に初めて気づいたのは、紀伊長島ICと海山ICが開通した2014年頃でした。穂がまだ付いていない時期にはススキかなと思っていたのですが、秋に穂が出て、初めてススキではないことに気づきました。ススキより数倍



図1 調査範囲

穂が長く、葉の幅も広く、草丈は穂の長さを加えると2m以上になっています。調べてみるとヨシスキというイネ科植物であることが分かりました (図2).

ヨシススキは、インド～東南アジアを原産とするイネ科の大型多年生植物（植村ほか2010）で、日本には、飼料や防風用として沖縄や鹿児島県種子島に持ち込まれ、かなり早くに逸出し、野生化した外来種です（初島ほか1967，茨木ほか2015，長谷川2020）。しかし、2010年頃を境に、各地から自動車道路沿いの法面などでヨシススキが増えているという報告が増えてきました（茨木ほか2015）。増加の原因は、道路法面の緑化用に輸入されたススキ種子にヨシススキ種子が混入していたためといわれています（茨木ほか2015，稲垣ほか2022）。また実際、法面緑化に使用した中国産ススキ種子にヨシススキ種子が混入していたことが確認されています（山田2015）。

ヨシススキは環境省の「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」にも掲載されており、利用上の留意事項として「繁殖力が強く、大型で強固な株を形成する植物であることから、在来種の生物多様性の保全上重要な地域に侵入するおそれのある場所には、持ち込まない。外国産のススキに混入したものを持ち込まない注意も必要である。」と明記されています（環境省2015）。紀勢自動車道は2014年に紀伊長島IC－尾鷲北IC間が開通しています。一方、熊野尾鷲道路は尾鷲南IC－三木里ICが2008年に繋がり、賀田IC－熊野大泊IC間が2013年に開通しています。2008年に開通した三木里IC付近の道路法面にはヨシススキが生育していないことから、この区間の緑化工事では、まだヨシススキの種



図2 紀勢自動車道沿いに繁茂するヨシススキ。草丈は2mを超える。（2023年11月2日）



図2 紀勢自動車道沿いに繁茂するヨシススキ。草丈は2mを超える。(2023年11月2日)



図3 紀伊長島地区で確認されたヨシススキ生育地点。①～⑨紀勢自動車道各トンネル間、⑩紀北町東長島、⑪赤羽川、⑫赤羽川河口、⑬紀北町長島加田西交差点付近、⑭紀北町三浦、国道42から豊浦神社へ行く道路の入り口付近、⑮紀北町三浦三浦津波碑前の礫浜、⑯紀北町三浦大瀬川河口の川原、⑰紀北町馬瀬原の池北側の土砂採取跡地

を拡大していくのではと懸念されます。今のうちにヨシススキがどのように分布を広げているのか、その実態を把握しておくことも必要かと思い、2023年11月に紀伊長島から熊野市まで国道42号線や311号線、一般道周辺を調べてみました。大雑把な調査でしたが、過去の調査と比較することもでき、いくつかの知見を得ましたので、紀伊長島地区、海山地区、尾鷲地区、熊野地区に分けて、それぞれについて報告します。

紀伊長島地区

高速道路沿いおよび国道42号線沿いと赤羽川の河原を主体に調べました（図3）。ヨシススキ生育地点は図3に示したように①～⑰の17地点ほどありました。紀伊長島全域を調べたわけでもないので詳しく調査すれば生育地点はもっと増えると思います。以下にこの調査で把握できた各地点の生育状況について述べることにします。

- ・①～⑨ 紀勢自動車道路沿い、トンネル間の道路法面やトンネル坑口周辺等に群生していました。自動車道の脇だけでなく近くの山の斜面や林道沿いにも侵入しています。
- ・⑩ 片上池より国道42線を1.2kmほど南下した道路沿いの空地に6株ほど、それより150mほど東側へ入った空地に100株弱生育していました。2015年頃には見られなかった光景です。
- ・⑪ 赤羽川川原と川岸、赤羽川を渡る自動車道の橋より上流へ約500m、下流へ約700m



図4 ヨシススキが赤羽川川原一面に群生している。おそらく紀勢自動車道から種子が風によって運ばれ定着したものと推測される。

子は混入していなかったと推察されます。しかし、2010年代に入ってから開通した区間では、道路の法面や脇のすべてにおいてヨシススキが繁茂していることから、全国各地の自動車道路と同じように、この時期の緑化工事にヨシススキの種子が混在していたと思われます。

ヨシススキの種子はススキと同様、風で散布されるので、風に乘ればどこまでも分布を広げることが可能です。実際、2023年現在、高速道路外のあちこちでヨシススキが散見されます。2015年頃には見られなかったところでも大きな株が出現しています。また、以前には数株しかなかったところも、現在10倍ほどに増えているところも見受けられます。これらの発生源は高速道路だと考えられますが、今後さらに分布

までの範囲の河原に大小様々な群落がいくつか散在していました。株数は500を超えると推測されます。今後さらに上流へ分布を広げていくことが考えられます(図4)。また右岸の荒地や左岸付近の水田でも散見されました。

- ・⑫ 赤羽川河口の埋め立て造成地、荒地に3株確認しました。
- ・⑬～⑰ 国道42号線沿い、⑬に3株、⑭1株、⑮三浦の礫浜約10株、⑯大瀬川河口の川原約10株、⑰に4株確認しました。

今回の調査で、ヨシススキは自動車道路外にも広く拡散していることが分かりました。特に赤羽川川原(図3の⑪)や東長島の空地(同⑩)では大きな群落を形成していました。わずか数年の内にこれだけの大きな群落を作ることに驚きを覚えます。次回は海山、尾鷲、熊野地区での生育状況を報告します。

この調査を行うにあたり木許勝弘氏には自動車を運転してもらうなど調査に協力していただきました。厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 長谷川匡弘2020. 道路沿いで増加中 巨大植物ヨシススキ. *Nature Study*, 66(4), 2-4.
初島住彦・天野鉄夫1967. 改定沖縄植物目録. 沖縄生物教育研究会, 那覇.
稲垣栄洋・小林陽平2022.刈り取り回数の違いがヨシススキとススキの種間競合の優位性に及ぼす影響. *日緑工誌*, 48(1), 111-114
茨木靖ほか2015. 日本国内におけるヨシススキ(イネ科)の分布と生育状況について. *植物地理・分類研究*, 62(2), 85-92.
植村修二ほか2010. 日本帰化植物写真図鑑第2巻. 全国農村教育協会, 東京.
山田 守2015. ヨシススキ. *日緑工誌*, 41(2), 352.

(やまもと かずひこ: 尾鷲市小川西町8-40)

事務局から

○2024年会費納入のお願い

本会の会費は前納性です。会費納入状況等を同封しますので、来年1月末日までにお振込み下さい。なお、退会される方は、お手数ですが、一言お知らせ下さい。

○「いせきびNo.10」を同封

本誌は「三重貝なま」による発行です。同会は、貝類の調査を2012年から実施しており、県内では生息情報の少ない地域を順次調べています。また、親睦をかねて年1回の県外調査も実施し、これらの成果をいせきび誌上で発表しています。現在、仲間を募集中ですので、興味のある方は事務局の中 優さん(nakamasaru1284@castle.ocn.ne.jp)に問い合わせ下さい。

編集後記

本誌にも多く掲載されている外来種問題や希少種保護が社会問題にもなっています。齢を重ねて改めて思うのは、自然とは変化し続けるものであり、その時々で問題への対応も変わってくるべきではないかということです。50年前の目の前の景色は今と同じにあらずで、それらを見てきた我々世代が後世にその姿を残す術がないものか思案しています。良いアイデアがありましたらご提案ください。次号は3月発行です(善)。

自然誌だより138号 Mie Natural History Research Group News, No.138

発行日 2023年12月11日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)
e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp